

集安所在、高句麗壁画墓の基礎的整理

— 『洞溝古墓群 1997年調査測繪報告』に関するメモ—

關尾史郎

はじめに

中国・吉林省集安市にある丸都山城址と国内城址は、かつて高句麗が国都としたところだが、その近郊には、高句麗時代の古墓群が広範囲にわたって点在している。そしてその古墓のなかに、墓室の壁面などに図像を描いた壁画墓が含まれていることも、早くから知られていた。古墓群に対する調査は戦前にさかのぼるが⁽¹⁾、戦後も現地・吉林省の関係者の手によって調査が精力的に続けられ、現在に至るまで多くの成果が蓄積されている。また日本でも壁画墓を中心に関心が注がれ、近年も優れた研究成果が生み出されている⁽²⁾。

私は「地域」に対する関心から、中国世界の西北に位置する河西地域の磚画墓や壁画墓に対して検討の機会をもったが、東北に位置するこの地の壁画墓についても、資料やデータを収集・整理しておく必要性を痛感するようになった。しかし管見の範囲では、この地の壁画墓を俯瞰できるような工具書は手近にないようなので、あらためて本稿を用意することにしたのである。本稿はあくまでも基礎的・初歩的な整理にすぎないが、それゆえにまた多くの同学と共有できるものがあるのではないかと思っている⁽³⁾。

I 『中国文物地図集 吉林分冊』

本節では、『中国文物地図集 吉林分冊』（以下、「文物地図集」と略記）⁽⁴⁾の集安市の項に紹介されている高句麗の古墓（群）から壁画墓を抽出する。本書は、文物地図集のシリーズのなかでは最初期に刊行されたものであり、そのため新らしいデータを欠いている憾みが残るが、現時点においても、吉林省の出土文物に関する最もまとまったデータ集であることには変わりがないので、おおよその状況を把握するためにはなお有効であろう。

同項には、集安市所在の古墓群として、洞溝古墓群（B1）から蒿子溝墓群（B73）までと、老虎哨墓群、上活龍墓群、および下活龍墓群の合計 76 に上る高句麗時代の古墓群が列挙されている。これらの墓群の範囲は、集安市街区とこれに隣接する太王鎮・麻線郷にとどまらず、楡林鎮・涼水朝鮮族郷・大路鎮・青石鎮・清河鎮・頭道鎮・財源鎮・花甸鎮・台上鎮など、集安市の全郷鎮に及んでいる⁽⁵⁾。このうち、B1 の洞溝古墓群（集安市街区とその周囲）は、1 から 44 までの枝番号が附された墓区や個別の墓から構成されている。個別の墓と、それらから構成されている墓区が同じ層位で番号が附されているので、注意を要する。今、墓区ご

とに整理すると、以下のようになる。

好太王碑 (B1-1、禹山墓区)

下解放墓区 (B1-2、太王鎮) 所属墓 : 51 座 / 収録墓 : 3 座 (B1-3~5)

禹山墓区 (B1-6、集安市区北~東北) 所属墓 : 3904 座 / 収録墓 : 17 座 (B1-7~23)

山城下墓区 (B1-24、集安城区東北) 所属墓 : 1582 座 / 収録墓 : 7 座 (B1-25~31)

万宝汀墓区 (B1-32、集安城北) 所属墓 : 1516 座 / 収録墓 : 1 座 (B1-33)

七星山墓区 (B1-34、集安城西) 所属墓 : 1708 座 / 収録墓 : 2 座 (B1-35~36)

麻線墓区 (B1-37、麻線郷) 所属墓 : 2539 座 / 収録墓 : 7 座 (B1-38~44)

六つの墓区に所属する墓の合計は 11,300 座に上るが、「文物地図集」に掲載されているのは、37 座にすぎないことがわかる。このほか、B38 の長川古墓群 (青石鎮、所属墓 : 120 座) も、1・2 の枝番号が附されている 2 座から構成されている。これらのうち、壁画墓、および壁画墓を含むという説明があるのは、以下のものである (*印を附したのは、題記があるもの)。

冉牟墓 (B1-3、下解放墓区、XM001、5 世紀中) *

環紋墓 (B1-4、下解放墓区、XM003、5 世紀末)

第 31 号墓 (B1-5、下解放墓区、XM031、約 5 世紀)

觚墓 (B1-7、禹山墓区、YM457、約 4 世紀末)

舞踊墓 (B1-8、禹山墓区、YM458、約 4 世紀末)

四神墓 (B1-9、禹山墓区、YM2112、約 6 世紀末)

五盔墳 4 号墓 (B1-10、禹山墓区、YM2104、約 6 世紀末)

五盔墳 5 号墓 (B1-11、禹山墓区、YM2105、約 6 世紀末)

第 1041 号墓 (B1-13、禹山墓区、YM1041、5 世紀中葉)

馬槽墓 (B1-14、禹山墓区、YM1894、約 5 世紀)

三室墓 (B1-15、禹山墓区、YM2231、約 5 世紀末)

四盔墳 (B1-16、禹山墓区、YM2106~2109、----)

王字墓 (B1-25、山城下墓区、SM332、約 5 世紀)

蓮花墓 (B1-26、山城下墓区、SM983、約 5 世紀)

折天井墓 (B1-27、山城下墓区、SM1298、約 5 世紀)

亀甲墓 (B1-29、山城下墓区、SM1304、----)

第 1368 号墓 (B1-33、万宝汀墓区、WM1368、約 5 世紀末)

麻線溝 1 号墓 (B1-40、麻線墓区、MM0001、約 5 世紀)

長川 1 号墓 (B38-1、長川古墓群、約 5 世紀)

長川 2 号墓 (B38-2、長川古墓群、約 5 世紀)

以上の壁画墓が所属する墓区について、あらためて位置関係を確認しておきたい⁽⁶⁾。まず下解放墓区は国内城址のはるか東方にあるが、これに対し、禹山墓区は国内城址の東側に接するようにして位置する。次の山城下墓区は丸都山城址の東南から南側にかけての一带に相当し（一部は城壁内部にまたがる）、その南端が万宝汀墓区に接するが、この万宝汀墓区は、国内城址の北側に立地する。それに対して、国内城址の西側に位置するのが七星山墓区で、さらにその西側には麻線墓区が連なっているが、国内城址北側の万宝汀墓区と、同じく西側の両墓区には壁画墓が少ないことがわかるだろう。また長川古墓群は、集安市街区から、鴨緑江沿いに直線にして約 18km 程さかのぼった青石鎮長川村にある⁽⁷⁾。

II 『洞溝古墓群 1997 年調査測絵報告』

本節では、『洞溝古墓群 1997 年調査測絵報告』（以下、「洞溝古墓群」と略記）⁽⁸⁾に掲載されている古墓（群）から壁画墓を抽出する。本書は副題にもあるように、1997 年に行なわれた調査結果を中心に、1 万座以上に上る墓について、墓型・規模・現状などに関するデータと、位置を示す地図（分布図）を収録している。現地の研究機関による包括的な調査は 1966 年に開始され、1997 年の調査は第 3 回目ということだが、本墓群の 4 割強は、「石墳類」すなわち積石墓であり、かつ既に破壊されているものも少なくないようなので、現存する「土墳類」はけっして多くはない⁽⁹⁾。いま、墓区ごとの墓数を、破壊されたものも含めて上げる。

禹山墓区（Ⅰ区、B1-6）：0001～3600

山城下墓区（Ⅱ区、B1-24）

大川片：0001～0024

山城下片：0002～1569

磚廠片：0001～0329

万宝汀墓区（Ⅲ区、B1-32）：0001～1511

七星山墓区（Ⅳ区、B1-34）：0001～1711

麻線墓区（Ⅴ区、B1-37）：0001～2483

下解放墓区（Ⅵ区、B1-2）：0001～0051

墓区ごとの墓数は、「文物地図集」のそれと微妙に異なるが、その理由は不明である。またこのうち壁画墓については、「第一部分 洞溝古墓群概説」に「四 集安高句麗壁画墓の類型・分期与年代」を設けて紹介と整理が行なわれている。煩を厭わず、その「表 11 洞溝古墓群和

長川墓群已発現壁画壁画墓情況一覽表」から転記すると、以下のようになる。

馬槽墓（禹山 1894 号墓=B1-14）
1041 号墓（禹山 1041 号墓=B1-13）
散蓮花墓（禹山 1896 号墓）
觚墓（禹山 0457 号墓=B1-7）
舞踊墓（禹山 0458 号墓=B1-8）
三室墓（禹山 2231 号墓=B1-15）
四神墓（禹山 2113 号墓=B1-9）
五盃墳四号墓（禹山 2104 号墓=B1-10）
五盃墳五号墓（禹山 2105 号墓=B1-11）
3319 号墓（禹山 3319 号墓）
王字墓（山城下 0332 号墓=B1-25）
蓮花墓（山城下 0983 号墓=B1-26）
折天井墓（山城下 1298 号墓=B1-27）
亀甲蓮花墓（山城下 1304 号墓=B1-29）
1405 号墓（山城下 1405 号墓）
東大坡 365 号墓（山城下 0365 号墓）
1305 号墓（山城下 1305 号墓）
1407 号墓（山城下 1407 号墓）
美人墓（山城下 1296 号墓）
798 号墓（山城下 0798 号墓）
1368 号墓（万宝汀 1368 号墓=B1-33）
645 号墓（万宝汀 0645 号墓）
麻線溝一号墓（麻線 0001 号墓=B1-40）
冉牟墓（下解放 0001 号墓=B1-3）
環紋墓（下解放 0033 号墓=B1-4）
31 号墓（下解放 0031 号墓=B1-5）
長川一号墓（=B38-1）
長川二号墓（=B38-2）
長川四号墓

洞溝古墓群のほか、長川古墓群に属する墓も列挙されているが、「文物地図集」の 20 座よりも多く 29 座である。破線を引いた 10 座が「文物地図集」に記載されていないものだが、

逆に「文物地図集」に記載されている四盃墳については、記載を欠いている。これについては、「文物地図集」が、墓室一面に石灰が塗布されていたことを根拠に、「或有壁画」と推測しているものの（120頁）、壁画の存在が証明できていないわけではないためだろう。一方、「洞溝古墓群」に記載されている破線の10座のうち、散蓮花墓は発見された20世紀初頭の時点では壁画が残っていたものの、程なくして破壊されたもようであり、(禹山)3319号墓も1997年時点で壁画の痕跡が認められたという。また万宝汀645、山城下1305、1405、1407、および798号墓の5座では、調査が行なわれた1991年・1993年の時点で、壁画の残片が出土した。東大坡365号墓は東壁に墨線の勾勒の痕跡があるにすぎず、美人墓も調査が行なわれた1913年の時点で、既に壁画が剥落しており、かろうじて婦人像が判別できる程度であったという。最後の長川四号墓は墓道や墓室壁面に人物像や蓮花紋が描かれているという⁽¹⁰⁾。

表11から、洞溝古墓群のなかでも、禹山墓区と山城下墓区に多くの壁画墓が集中していることがあらためて理解できよう。

III 壁画墓の時間

さて「文物地図集」によると、最古の壁画墓はおおよそ4世紀末の舩墓と舞踊墓（ともに禹山墓区）で、最新のものはおおよそ6世紀末の四神墓、五盃墳4号墓と5号墓（いずれも禹山墓区）である。したがって洞溝古墓群は、壁画墓から見るかぎり、4世紀末から6世紀末に至る2世紀にわたって営まれたことがわかる。高句麗は5世紀前半に平壤に遷都したが、遷都後も洞溝古墓群が継続して営まれていたことになる。また禹山墓区は国内城址の東側に広がる広大な墓域だが、丸都山城の東南方にも相当しており、多くの壁画墓が造成されただけでなく、最も早くに造成が始まったということになる。

一方、「洞溝古墓群」は、これらの壁画墓を墓制と壁画の内容から、4期に時期区分している。第1期は、4世紀の中葉から末期で、おおむね単室墓だが、甬道の両側に耳室を有する。壁画は、墓主の生活風景や蓮花紋をはじめとする装飾紋様。第2期は、4世紀の末期から5世紀初頭。第1期の甬道耳室から発展した前半室を過道にもつ。壁画の面では、墓主の生活風景の他に藻井に四神（ただし、一部を欠くものが多い）が現れるようになったタイプと、図案を中心にしたタイプとがある。第3期は、5世紀の中葉から6世紀初頭で、前・後室の複室構造を基本とする。壁画は、やはり墓主の生活風景と図案の二つのタイプがあるが、前者の四神は完全に揃うようになり、かつ神仙や仏教の題材が増加傾向にある。また後者の図案も大型化する。最後の第4期は、6世紀から7世紀初頭までで、方形の単室墓が基本となる。壁画は石灰を用いず、直接壁面に描かれるようになり、四神が中心で、その他怪獣や日月神・伎楽仙人などが多く描かれているとする。4期それぞれの代表的な壁画墓としては、以下のような例があげられている（*は、異説があるものや推定を含むものを示す）。

第1期：麻線溝一号墓、馬槽墓、山城下332号墓、長川二号墓、禹山3319号墓、折天井墓、禹山1041号墓（禹山3319号墓以下の3座は「石墳類」に属する）。

第2期：舞踊墓、觥墓、散蓮花墓、下解放31号墓⁽¹¹⁾。

第3期：長川一号墓、三室墓、環紋墓、冉牟墓、亀甲墓、万宝汀1368号墓*。

第4期：四神墓、五盔墳四号墓、五盔墳五号墓、東大坡365号墓*。

4世紀中葉から7世紀初頭という時期設定は、「文物地図集」のそれよりも長期に及び、中国の歴史で言えば、いわゆる五胡十六国時代から南北朝時代を経て、隋唐時代に至る時期である。この時期、中国においても各地で多くの壁画墓（磚画墓を含む）が造営されたことは周知であり、高句麗壁画墓の技法やモチーフがこれらから大きな影響を受けたであろうことは想像にかたくない。しかし本稿では、その大きな影響を主張する以前に、高句麗壁画墓の内部での継承関係を重視し、さしあたり、その手がかりになるようなデータを整理したい。

IV 壁画の内容—墓主の画像—

前節に述べたように、「洞溝古墓群」によると、集安の高句麗壁画墓には、各種の図案を描いただけのものが少なからず含まれている。図案の様式にも時期により違いが認められるようだが、ここでは、人物像を描いたものを対象としたい。人物像は、墓主（夫婦）とそれ以外に大別できようが、まず「表12 集安高句麗壁画墓形制与壁画内容」によりながら、墓主が墓室壁面に描かれた墳墓をあげると、下記のようなになる（順序は、表12の掲載順）。

三室墓（禹山2231号墓）第一室

觥墓（禹山0457号墓）

舞踊墓（禹山0458号墓）

馬槽墓（禹山1894号墓）南室・北室

麻線溝一号墓（麻線溝0001号墓）

長川一号墓 前室

禹山1041号墓

該当するのは以上の7座で、うち禹山墓区のもの5座を占める。このうち、觥墓と舞踊墓（ともに双室墓）は1930年代の発掘により出土したもので、早くから角抵塚・舞踊塚として知られていたものである。前者の角抵図も後者の舞踊図もそれぞれの奥室（後室）右壁に描かれているが⁽¹²⁾、ともに奥室後壁（主壁）⁽¹³⁾には、墓主夫婦の図像が配されている。馬槽墓（南北＝左右の双室墓）でも、南室・北室とも、後壁に墓主夫妻が描かれており、麻線溝一号墓（単室墓）も同様に、墓室主壁に墓主夫婦が位置している。禹山1041号墓は「石墳

類」だが、墓主像の配置はこれらと同じである⁽¹⁴⁾。一方、長川一号墓では、墓主像が前室左壁（北壁）の上部に描かれている。三室墓（コの字型に屈曲した三室構造）は、第一室の後壁だが、その奥に第二室はなく、第二室に通じる甬道はその手前で直角に左折（すなわち北向き）しているので、説明がむづかしい。これらのなかでは、馬槽墓・麻線溝一号墓・禹山 1041 号墓が第 1 期、舩墓・舞踊墓が第 2 期、そして長川一号墓と三室墓が第 3 期に属する。

すなわち第 1 期と第 2 期では、単室と双室とを問わず、墓主像は、後壁（双室の場合は奥室の）に描かれているのに対し、第 3 期になると、墓主像は墓内部で、墓門近くの墓室壁面に移動してくるのである。墓主の亡骸は、後壁近くに安置されたであろうから、第 1 期と第 2 期では、それを見下ろすような位置にその図像が描かれたことを、意味している。しかし第 3 期に入ると、同じ墓内でも、亡骸と墓主像とは間隔が開くことになる。長川一号墓の場合、後室の壁面には、後壁も含め、蓮花紋が描かれており、三室墓の場合は、第三室の後壁（西壁）には力士像が描かれていた。このような変化は、墓主像の役割が低下したことを示唆するが、第 3 期の違いはそれにとどまらない。長川一号墓の場合、墓主像が描かれている前室左壁には、これにとどまらず、角抵・歌舞（墓主像の左右）・狩猟（騎射、墓主像の下部）などの図像が所狭しと描かれており、上部中央に描かれた墓主像がことさら強調されているようには見えないのである⁽¹⁵⁾。このような壁面の分割・利用を第 1 期・第 2 期のものと比較してみよう。

この問題に関しては、必ずしも豊富なデータがあるわけではないが、第 1 期の場合、禹山 1041 号墓では左右の壁面には人物像や狩猟図が、馬槽墓では左右・前壁に、礼輦・歌舞・戦闘・狩猟などの図像が、また麻線溝一号墓では左右壁に舞踊・騎士図などが描かれているという。墓主（夫婦）と同じ壁面に描かれているのはせいぜい侍女・僕従くらいなのである。これは第 2 期もほとんど同じで、舩墓では、左右壁に舩・進食・車馬などが、また舞踊墓では、進食・歌舞・牛車・狩猟などの図像が描かれている⁽¹⁶⁾。第 2 期までは、墓主像は定位置とも言うべき、墓内最奥の後壁に、侍女や僕従をべつにすれば単独で描かれていたということになり、墓主像の役割の低下傾向は、複数の面から首肯されよう。

以上が、墓主像をめぐる変化だが、これら 7 座以外にも人物が描かれた墓が 3 座ある。

環紋墓（下解放 0033 号墓）

長川四号墓 南室

美人墓（山城下 1296 号墓）

いずれも詳細は不明だが、環紋墓と長川四号墓南室はともに左壁⁽¹⁷⁾、また美人墓はかつて二人の婦人が描かれていたようだが、早くに剥落していた。このうち、環紋墓だけは第 3 期であることが示されているが、左壁以外の 3 面はすべて環紋図案であり、左壁にも環紋が

見られるという。これらの人物像が墓主を描いたものであるか否かは判断が容易ではないが、その可能性を積極的に主張することはできない。

おわりに

以上、「洞溝古墓群」の内容に沿って、集安の高句麗壁画墓についてデータを紹介・整理してみた。ただし図像としては、墓主像を取り上げ、その変化を簡単になぞっただけで終わってしまった。墓主像の役割が低下するのは対照的に、四神に代表される神獣が壁面を飾るようになっていくことについては、既に多くの論者が指摘するところだが、本稿でもふれた長川一号墓では、それとともに仏教信仰の影響が認められる。前室後壁上の藻井部分中央に描かれた菩薩坐像がそれを象徴しているが、中国・河西地域の磚画墓や壁画墓には見られない、このような思想の混淆をどのように説明すればよいのだろうか。

今は、平壤とその周辺各地に点在する壁画墓との総合的・比較的検討も含め⁽¹⁸⁾、多くを今後に委ねざるをえない。

註

- (1) 池内宏・梅原末治『通溝』（日満文化協会、1938、40年。復刻版：国書刊行会、1973年）は、その報告書である。
- (2) 門田誠一『高句麗壁画古墳と東アジア』（思文閣出版、2011年）、東潮『高句麗壁画と東アジア』（学生社、2011年）など。
- (3) 本稿は、2013年度新潟大学プロジェクト推進経費・発芽研究「東アジア世界の古代壁画とその宗教思想的背景に関する比較史的研究」（代表：關尾）による研究成果の一部である。
- (4) 国家文物局主編、中国地図出版社、1993年。
- (5) なお文物地図集刊行後、郷鎮の統廃合や、郷から鎮への変更などが行なわれ、現在では存在しないものがあるが、本稿に掲げる郷鎮名は、『吉林省地図集』（中国地図出版社、2009年）に依拠している。
- (6) 以下の記述は、後掲「洞溝古墓群」の「第三部分 洞溝古墓群墓葬分布図」による。
- (7) なお、金一権「高句麗の天文自然観と天思想」（東北亜細亜歴史財団編／東潮監訳／篠原啓方訳『高句麗の文化と思想』（明石書店、2013年））は、集安所在の高句麗壁画古墳を、全虎兌の研究に依拠して29座とする（他に、桓仁と撫順に各1座）。
- (8) 吉林省文物考古研究所・吉林省博物館編、科学出版社、2002年。
- (9) 1997年時点での墳墓総数は、10782座、そのうち現存しているのが6854座という（「洞溝古墓群」、13頁表3）。
- (10) 東大坡365号墓、美人墓、および長川四号墓については、「表12 集安高句麗壁画墓形制与壁画内容」による。なお理由はわからないが、表11と表12では、王字墓のように、同じ墓が異なった名称で記されているものがあるので、注意を要する。
- (11) 下解放31号墓については、第2期の具体例としてあがっている一方で、墓制から、第3期の特徴を有しているためか、第3期の具体例としても名が見えており、そこではむしろ第3期のなかでも第4期に近いとさえ書かれており（23頁）、理解に苦しむ。
- (12) 以下の行論には、「洞溝古墓群」の他、読売テレビ放送編『好太王碑と集安の壁画古墳—躍動する高句麗文化—』（木耳社、1988年）、早乙女雅博監修『高句麗壁画古墳』（共同通信社、2005年）、および耿鉄華『高句麗古墓壁画研究』（吉林大学出版社、2008年）などの図版や解説を参照した。
- (13) 表12では、後壁と主壁という表現が混用されている。また前註にあげた図録本には、奥壁という用語も見られる。
- (14) ただし「洞溝古墓群」は、これについては「主壁」という表現を用いている。
- (15) 実際のところ、墓主像は剥落しており、天蓋だけがかろうじて確認できる程度のものである（「洞溝古墓群」、附録図64）。
- (16) なお同じ第3期でも、三室墓は左右壁に、狩猟・出行・攻城などの図像が描かれている。
- (17) 長川四号墓については、人物像について、「北室の南壁」とする説もあり（東、前掲『高句麗壁画と東アジア』、168頁）、情報が錯綜している。
- (18) 人物図（墓主像）から四神図へという変化は、集安と平壤に共通する現象のようだが、その細部における違いという点については、あまり顧慮されていないように思われる。